

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	世代間交流を通じたミドル・リーダー教員の育成プログラム開発
プログラムの特徴	ベテラン教員との世代間交流を通して、ミドル・リーダー教員を育成するための研修プログラムを開発しようとするものである。本事業では、ベテラン教員を講師として招き、学習指導、生徒指導、学校運営等の諸領域で培ってきた経験、知識、技能を核とした研修プログラムを開発し、実施する。あわせて、実施した研修の成果をもとに、各自治体及び学校単位で世代間交流によるミドル・リーダー教員の育成を促すための研修テキストを作成する。目的をミドル・リーダー教員の育成に特化して世代間交流を活用するところに、本事業の特徴がある。

平成24年 3 月

兵庫教育大学 兵庫県教育委員会

平成 23 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム 実施報告書

I 開発の目的・方法・組織

1. 開発の目的

今後10年間で学校教員の約3分の1が入れ替わることが予測されているなか、ベテラン教員の知識や技能を次の世代に伝えることが焦眉の課題となっている。とりわけ、50歳代のベテラン教員が減少し20歳代の若年層の教員が増加するなかで、30歳代及び40歳代のミドル・リーダー教員を育成することが、各学校の教育活動の質を維持・向上させるためには不可欠である。そこで本プログラムでは、平成15年度から積み重ねてきた兵庫教育大学と兵庫県教育委員会との連携協力体制を基盤にして、ベテラン教員と30、40歳代教員との世代間交流を通じてミドル・リーダー教員を育成することを目的とした研修プログラムを開発することとした。

2. 開発の方法

研修プログラムの開発は、以下のように行った。

本学の教員が、これまで学部教育や現職教員を対象とした大学院教育において実施してきた授業、あるいは様々な機会において行ってきた研修を素材として活かしながら、本プログラムにおいて目指す世代間交流を通じたミドル・リーダー教員育成のための研修内容を検討し、原案として作成した。原案の作成にあたっては、平成22年度に実施した「世代間交流を通じた学校の活性化を促す研修プログラムの開発」との連続性を心がけた。その結果、外部講師としてベテラン教員を招き、研修の中で世代間交流を体験できるように工夫したり、外部講師の勤務校での世代間交流の活性化の実態を事例として学び、研修の参加者が実践に活かすヒントを得られるように工夫したりして、大学教員と学校現場の教員とが共同で研修を実施するという試みを積極的に行った。したがって、事前に十分に打ち合わせを行うなど、丁寧なカリキュラム開発に心がけた。大学教員の専門性を十分に活かした開発を出発点としながら、より実践的な内容となるように学校現場の教員との連携を重視した。

そしてその原案を下記で述べる組織において、外部の関係者から様々な意見を得て、その意見を基に必要な修正を行い、プログラムの原案を完成させた。

次に、実際に研修を行い、その内容の適否について検証を行った。研修場所は、本学本部がある加東キャンパス（加東市）を会場として行ったものと、交通の便のいい本学神戸サテライト（神戸市）で行ったものがある。検証の方法は、受講者によるアンケートを行い、それを踏まえながら各実施者が成果、課題について自己分析を行った。また、事後アンケートもを行い、研修の効果についても検証を行った。そして、その結果を下記の組織に提示し、外部の関係者からの評価も受けた。

以上のようにして、プログラムの開発を行った。

3. 開発の組織

兵庫教育大学では、平成19年3月に、現職教員の研修を支援するために本学が行う研修事業のプログラムを開発、実施することを目的として、「兵庫教育大学現職教員研修支援プログラム開発プロジェクト」を組織した。このプロジェクトでは、(1) 現職教員研修の教育内容・方法に関すること、(2) 現職教員研修における教育委員会・学校との連携協力に関すること、(3) 現職教員研修の運営体制に関すること、(4) 担当教員の研修（FD）に関すること、(5) その他現職教員研修のプログラム開発に関すること、以上5点について研究、開発を行うこととなっている。そのために「研修プログラムチーム」を設置し、本学教員、教育委員会および教育センター等関係者、公私立学校等関係者、学校長会等関係者、本学大学院学校教育研究科修士、によって組織している。

本事業も、この「研修プログラムチーム」において開発を行ってきた。本学教員が作成した研修内容の原案について検討を行い、主として、学校現場のニーズの観点からプログラム開発のための議論を行った。さらに、研修実施後に会議を開催し、実施状況の報告と反省点、改善点などの議論を行った。また、学内では、「研修プログラムチーム」の委員の他、研修の実施担当者も加えた会合を持ち、研修内容をさらに議論するとともに、実施に向けた実務的な調整を行った。

以上のような組織的な取り組みを通じて、開発を進めていった。

II 開発の実際とその成果（別紙「実施講座」のとおり）

- (1) “かかわり”から教育を見つめなおすーベテラン教員と学ぶ教育のコミュニケーションー
(渡邊隆信、大関達也)
- (2) 不登校への対応ーベテラン教師やスクールカウンセラー（SC）の文化的伝達ー
(浅川潔司)
- (3) 子どもと学級をみる目を広げる（秋光恵子）
- (4) 先輩教員とともに学ぶ特別支援教育ー「通常学級の授業づくり」と「個別の指導計画」ー
(宇野宏幸、井澤信三)
- (5) 理科野外活動が得意な先生になろうーベテラン教員を目指してー（渥美茂明）
- (6) 校内研修の企画と進め方ー教職員が主体的に参加できる研修をつくるには？（大野裕己）
- (7) 水彩指導のポイントを学ぼう（初田 隆）

III 大学・教育委員会連携による研修についての考察

1. 連携を推進・維持するための要点

連携を推進・維持するためには、まず組織をつくるのが大切である。組織をつくるためには、研修に対する考え方、ねらいなど、基本的な理念について共通理解を図ることが欠かせない。

次に連携を進めていく際に必要なことは、大学と教育委員会とのコミュニケーションを活発にすることである。それは、本プログラムに止まらず、幅広く、日常的に協働して、さまざまな取組みを行うことを必要とする。それぞれの立場に対する理解を深めて、スムーズに連携できる関係を構築することが欠かせない。

またお互いの立場の理解を深めることは、それぞれの専門性に対する理解を深め、それらを積極的に活かしていくことを促すことになるであろう。教育委員会は、学校現場の問題に即座に役立つ研修課題に取り組む内容を企画する専門性が高いのに対して、大学は、学校現場の問題を読み解き、その背景を理解したり、より本質的に問題を考えたりする研修内容を企画する専門性が高い。また大学は専門的知識も豊富に保有している。両者の専門性のバランスをとることが必要である。

専門性のバランスをとることは、双方が、お互いの専門性を学びあうこと、また追求しようとするテーマについて十分に議論を行い、お互いが新たな知見を得ることができるようになることが必要である。

さらに、連携の基盤といってもよいことであるが、事務組織をつくり、実務的な連絡調整をスムーズに行えるようにすることが重要である。連携には、きめ細かな調整が重要であり、それを担う事務組織の体制を整備することが必要である。例えば、研修を実施する際の受講者数の確認や研修の準備物の確認など、事前に事務的な連絡調整を密にしておくことが大切である。

2. 連携により得られる利点

大学としては、教育委員会や学校の実践的課題に触れることができる点が最も大きな利点である。直接、当事者と交流することにより、一般的に言われていることの実情を実感として理解することができるからである。そうした経験を重ねることにより、自らの専門的知見をどのように伝えていけばよいのか、より深く考えることができるようになる。学校現場に対する理解度が深まるとともに、教職員に対する研修などの指導力、授業力を向上させることが可能になる。そして、そうした関わりが大学と教育委員会、学校との信頼関係を深めることにつながり、特に教員養成系大学としては、そうした信頼関係は、大学の教育研究、大学運営にとって大きな利点となる。

教育委員会としては、研修の多様化、体系化を大学に任せながら図ることができ、より豊富な研修体系を構築することが可能となることが利点である。特に財政事情が厳しくなりつつある状況の中では、連携による費用の節約にもなり、限られた予算の中でかなり豊富な研修講座を提供できるという利点が考えられる。少ない予算で、多様性と専門性を備えた体系的な研修を開発していくことにつながると言えるであろう。また大学との連携は、専門的知見を学び、取り入れるよい機会であり、教育委員会の関係者の力量向上にもつながるといえる点も利点としてとらえることができる。

また教育委員会にとっての副次的な利点として、「研修プログラムチーム」の会合では複数の教育委員会の研修担当機関の代表者が顔をそろえるため、各機関での研修の内容や方法についての考え方や取組を相互に情報交換できる。

3. 今後の課題等

もっとも大きな課題は、研修の受講者にとってはよい職能開発の機会となっているが、それが学校全体になかなか活かしかねないという点である。本事業の事後アンケートにおいては、「講座終了後、研修で学んだことを活かした取り組みを行ったり、役立っていることはありますか？」の問いに対して、約70%の受講者が「はい」と回答している。何らかの成果は上がっていると思われるので、それを学校全体、地域全体に普及させることを促す取り組みが必要である。学校経営の進め方、教育委員会の学校への関わり方、そして学校内外での研修の工夫などによって、取り組んでいくことができるとと思われる。そうした取り組みを、大学と教育委員会が連携してさらに充実させることが課題となる。

IV その他

キーワード

世代間交流 ミドル・リーダー教員の育成 特別支援教育 不登校 理科野外活動
教育コミュニケーション 校内研修 水彩指導 学級経営

人数規模、研修日数（回数）

番号	研 修 名	人数規模	研修日数
1	“かかわり”から教育を見つめなおす －ベテラン教員と学ぶ教育のコミュニケーション－	A	B
2	不登校への対応 －ベテラン教師やスクールカウンセラー（SC）の文化的伝達－	B	A
3	子どもと学級をみる目を広げる	A	B
4	先輩教員とともに学ぶ特別支援教育 －「通常学級の授業づくり」と「個別の指導計画」－	A	B
5	理科野外活動が得意な先生になろう	A	A
6	校内研修の企画と進め方 －教職員が主体的に参加できる研修をつくるには？	A	A
7	水彩指導のポイントを学ぼう	B	A

（備考）

人数規模：A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上
研修日数：A. 1日以内 B. 2～3日 C. 4～10日 D. 11日以上

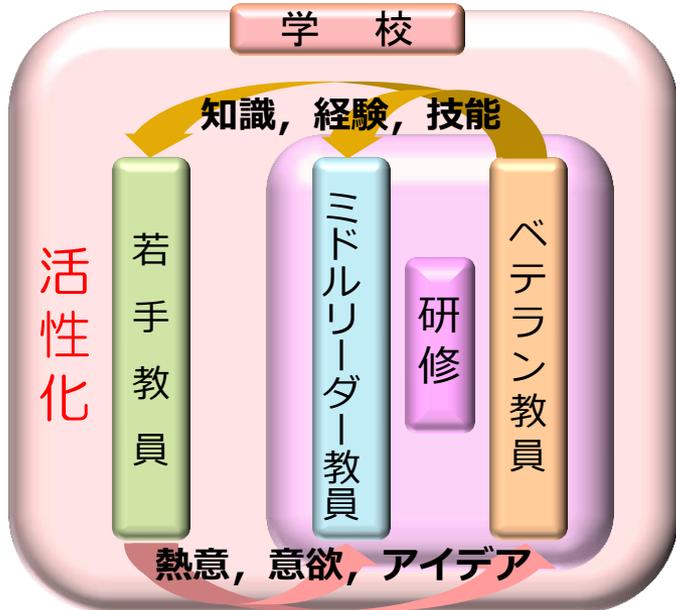
【問い合わせ先】

国立大学法人 兵庫教育大学
総務部企画課 広報・社会連携事務室
〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1
TEL 0795-44-2053

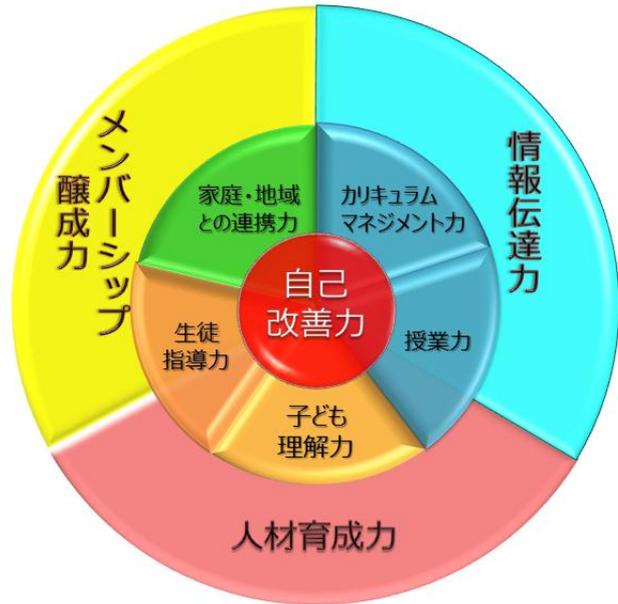
世代間交流を通じたミドルリーダー教員の育成プログラム開発

背景・目的	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 50歳代のベテラン教員が減少、20歳代の若年層の教員が増加（今後10年間で学校教員の約3分の1が入替え） ➤ 「ベテラン教員の知識・技能を次世代に伝えること」が焦点の課題 ➤ 学校教育活動の質の維持・向上のため、（30・40歳代）ミドルリーダー教員の育成が不可欠 ➤ ミドルリーダー教員の養成に特化した世代間交流を通じた学校の活性化を促す研修プログラム開発
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> ➤ ベテラン教員の知識・経験等を伝える研修プログラムの開発、実施、検証 ➤ 研修成果をもとに、ミドルリーダー教員の育成を促すための研修テキストの作成
実施手順	

研修プログラム概念図



ミドルリーダー教員の必要とする資質能力



(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

【報告書】

開発の実際とその成果

1. 「“かかわり”から教育を見つめなおす

ーベテラン教員と学ぶ教育のコミュニケーションー」講座

○ 研修の背景やねらい

教育の基本は教師－生徒，生徒－生徒，教師－教師といった人間同士のコミュニケーションに求めることができる。本講座では，ベテラン教員との交流を通して，教育におけるコミュニケーションの特質と課題は何か，さらに望ましいコミュニケーションとはどのようなものなのか，といった問題について，教育学の視点から考察することをねらいとする。教育実践の場面ですぐに使えるコミュニケーションのスキルを習得するばかりでなく，コミュニケーションの基本的問題をじっくりと検討することを通して，日常の仕事のなかではゆっくりと考えることができないような，教育の本質，学びの原点，人間の成長について探求する。

具体的には，元小学校教諭の経験の振り返りと大学教育の理論的考察を通して，子ども理解を深めるための教師と子どもとのコミュニケーション，学校組織のメンバーシップを醸成するための教師間のコミュニケーション，そして，学校と家庭とが子どもの教育において協力するためのコミュニケーションについて理解を深めることをねらいとした。

○ 対象，人数，期間，会場，講師

対 象：小・中・高等学校教員

人 数：6人

期 間：平成23年8月23日（火）～24日（水）2日間

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：渡邊 隆信教授，大関 達也准教授

中津 俊彦元教諭（たつの市初任研担当非常勤講師）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

学校教育場面におけるコミュニケーションの様態と背景は多様かつ複雑である。本講座ではまず，元小学校教諭が自らの教職経験をふまえて，対子ども，対保護者，対同僚とのコミュニケーションについて総論的に論じた。その上で，教師－子どものコミュニケーションに焦点づけながら，「語る－聴く」と「待つ」という2つの観点から，教育コミュニケーションの原理的問題について各論的に考察することにした。

○ 各研修項目の内容，実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容，形態，使用教材，進め方等
オリエンテーション	30分 (1日目 午前)	講座のねらいと進め方を理解する	講座の趣旨説明，自己紹介，“カフェ”スタイルによる対話の意義・方法の説明
「教師－子ども－親」関係の変化と課題	90分 (1日目 午前)	ベテラン教員の経験談を通して，「教師－子ども－親」関係の変化と課題について理解する	・内容：約30年の教職生活において経験してきた「教師－子ども－親」関係の事例を3つ紹介する。 ・実施形態：講義形式 ・使用教材：なし ・進め方の留意事項：受講生の質問に答えながら「教師－子ども－親」関係の変化と課題について具体的な事例をもとに講述する。

グループ演習	120分 (1日目 午後)	「教師－子ども－親」関係の変化と課題について受講生相互が対話を深める	<ul style="list-style-type: none"> 内容：2グループに分かれて“カフェ”スタイルにより、「教師－子ども－親」関係の変化と課題について、受講生のこれまでの経験や普段抱いている思いを相互に語り聴き合う。 実施形態：演習 使用教材：模造紙（テーブルクロス）、水性ボールペン、花、茶菓子 進め方の留意事項：問題を明確化してその解決策を皆で考えるというスタイルではなく、喫茶店での談話のように自由な雰囲気の中で、じっくりと聴き合い、そこから新しい洞察の萌芽を各自が得ることを大切にす。
教育コミュニケーションにおける「語る－聴く」	90分 (2日目 午前)	教師－生徒の関係を「語る」と「聴く」という観点から考察することを通して、大人中心でもなく、子ども中心でもない、双方向的な教育のあり方について考察を深める	<ul style="list-style-type: none"> 内容：教育的行為を支える三つの関係（権力関係、相互主体的関係、倫理的関係）について検討する。 実施形態：講義形式・一部演習 使用教材：講義資料 進め方の留意事項：教育実践場面を想定して具体的事例をあげながら理論的な考察を進めるとともに、講義の途中で受講生が議論する機会をもうける。
教育コミュニケーションにおいて「待つ」ということ	90分 (2日目 午後)	子どもの学習活動の指導において教師が待つことの困難性と重要性について理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> 内容：近代学校における二つの時間（客観的時間、主観的時間）の相克について歴史的に整理し、主観的時間を充実させるための方策を検討する。 実施形態：講義形式・一部演習 使用教材：講義資料 進め方の留意事項：教育実践場面を想定して具体的事例をあげながら理論的な考察を進めるとともに、講義の途中で受講生が議論する機会をもうける。
まとめ	80分 (2日目 午後)	成果と課題の確認	受講生がワークシートに講座を通して学んだこと、考えたことを記述し、相互に発表する。

○ 実施上の留意事項

講師間で事前に直接会って話し合いをおこなうことにより、講座の目的や方法について共通理解を図った。講座当日は、一人の講師が講義をおこなっているときも他の二人の講師が受講生に混じって講義に参加した。受講生がリラックスして自由に話し合いができるような雰囲気づくりを心がけた。

○ 研修の評価方法，評価結果

講座のまとめの時間に，受講生にワークシートを使って講座全体の学びを振り返ってもらった。また後日，本学所定のアンケート用紙を事務局から受講生に送付してもらい，6名から回答を得た。いずれも，講座全体の評価はおおむね良好であり，アンケートにおける「研修講座全体の評価としては，期待通りでしたか。」という質問項目については，6名中4名が「全くそうだ」，2名が「そうだ」と回答した。

研修の内容については，「良い関係をつくるためには話すことで自己開示し，聴くことで相手を理解しようとする積極的な気持ちがとても大切だということを改めて感じました。」という意見に代表されるように，対子ども，対教師，対保護者との関わりに通底するコミュニケーションの基本を再認識したという意見が多かった。対子どもの関わりについては，自分のクラスの子どもたちが「いろいろな友だちとかかわりが持てるような工夫」を行っていきたいという意見や，「「聴いて待ち，待って語る」これを双方向で進める」ことの大切さを学んだという意見が出された。

“カフェ”スタイルでの研修の方法については，「カフェ形式は初めてでしたが，本当に話がしやすく，いい場の設定だなあと感じました。」「机がノートがわりになってすてきだった。机の上の交流も楽しさの一部だ。」「多忙な現場でも，このような方法は可能であると思います。」というように，“カフェ”スタイルによる対話の意義を理解し実践していこうとする肯定的意見が多く見られたことから，メンバーシップ醸成力を高めるためのヒントが得られたものと考えられる。

○ 研修実施上の課題

研修についておおむね良好な評価を得た一方で，「もう少し参加者が多いと（多すぎてもそれはそれで問題があるかと思いますが），より深まったのでは，と思いました。」といった意見が出され，適正な人数確保については課題を残した。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

【報告書】

開発の実際とその成果

2. 「不登校への対応

ーベテラン教師やスクールカウンセラー（SC）の文化的伝達ー」講座

○ 研修の背景やねらい

本講座を開設するに至った背景には、平成7年にスクールカウンセラーが学校に投入されて以降も、登校拒否生徒の発症率が一向に改善されないこと、教員の支援の力が、及ばず、むしろカウンセラーに丸投げ状態になっている現状による。

従って、児童生徒の理解がより妥当なものとなるように、特に登校拒否生徒への理解力を高める意図で講義を行う。

また、不登校の回復支援には生徒指導的配慮が欠かせない点も強調された。さらには、学校と家庭が連携を強めるほどに、回復支援の効果が上がることを明確に示した。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：学校心理学に関心を持つ教員，中・高等学校教員

人 数：17人

期 間：平成23年8月9日（火）

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：浅川 潔司教授

南 雅則教諭（宝塚市立長尾中学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

本講座の他にも、一般的な研修講座として、不登校に関するものを2講座開設した。これらを総合的に受講することで、包括的に不登校への対応が学べると考えたからである。しかしながら、本事業の研修プログラムとともに他の講座も受講した教員は数名いたが、大多数は単発の研修に終わった。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
不登校支援を目的にする講義	5時間	不登校の児童・生徒理解、教師の支援の力、家庭との連携の在り方について学ぶ	<内容>不登校の実態とその発生メカニズム及び対応の方法について講義した。 <実施形態>講義 <使用教材>適宜プリントを配布した。個人情報にかかわるものについては、講義終了時に回収し廃棄した。 <進め方>主として講義+質疑応答 <留意点>不勉強にして、情報不足の参加者が目に付いた。事前の学習指示等が必要に思われる。

○ 実施上の留意事項

十数年前の知識をひけらかす者などは知識があるだけ良いようなものの、あまりに不勉強である参加者が多く、研修の成果がどの程度上がったのかは不明である。これを改善するに当たっては、事前にテキスト等を指示して、予め学習しておくことの必要性を感じた。

○ **研修の評価方法，評価結果**

講師の反省も踏まえて言えば，アンケート結果より，それなりに自己満足した参加者が多いように思われるが，ひと夏過ぎて，その知識が維持されるかどうかについては不明である。

○ **研修実施上の課題**

切実な思いから研修講座を受講する参加者が半数，残りの半数は，とりあえず研修に参加したように思われた。双方の参加者に留意した講義を改めて検討する必要がある。

開発の実際とその成果

3. 「子どもと学級をみる目を広げる」講座

○ 研修の背景やねらい

本研修講座は、世代間交流を通じたミドル・リーダー教員の育成を目指した研修プログラムとして開発されたものである。児童・生徒の学びの基盤となる学級には、担任教師の「個性」と「技能」が如実にあらわれる。教師における「個性」の多様さは児童・生徒の多様な個性を伸ばすことにもつながるが、「技能」にバラツキがあるのは望ましいこととは言えない。教師の「技能」にはベテラン・中堅・若手といった異なる世代の教員相互の交流を通して培われるものも多く、近年の学校現場では、そのような世代間交流の要としての役割が中堅世代の教員に強く期待されている。そこで本研修講座では、中堅世代を中心とした教員に参加を募り、またベテラン教員を講師に迎えて、自身の「個性」を活かした学級経営の「技能」の向上、さらには各自の所属校における世代間交流を活性化することのできる能力の開発を目的とする。

ところで、近年の学校現場では「子どもが理解できない」といった声がしばしば聞かれる。児童・生徒に対する理解不足は学級経営や学習指導の効果を著しく阻害するものであり、児童・生徒理解は教師に不可欠なものである。児童・生徒に対する理解を深めるためには、まず教師自身が自らの「子どもをみる目」を客観的に理解することが重要である。なぜならば、教師に限らず人は誰でも「他者に対する自分の視点」には気が付きにくいものであり、児童・生徒をありのままに理解しているつもりでも先入観や偏りのある見方によって子どもを評価している可能性があるからである。それに加えて、自らの「子どもをみる目」を他の教師と共有し合うことも、お互いの「子どもをみる目」を広げることにつながる。このようなことから本研修講座では、教師用RCRTという方法を用いてそれぞれの教師が有する「子どもをみる目」の客観的な把握と理解を促進するとともに、異なる世代の教員で実践例を検討することによって、「子どもをみる目」をさらに広げる機会を提供する。異なる世代の教師間交流を取り入れることで、参加者自身の児童・生徒理解のみならず、経験知の伝達の重要性の理解にもつながるという効果が期待できると考える。

以上のように、本研修講座では参加者の子ども理解に関する自己改善力を高め、またその力を発揮することにより所属校におけるメンバーシップを醸成し、若手を中心とした人材の育成にも貢献するミドル・リーダーの育成を目指すものである。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：学級担任をしている小・中・高等学校教員

人 数：10人

期 間：平成23年8月8日（月）、10日（水）2日間

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：秋光 恵子准教授

川元 佳子教諭（加古川市立陵北小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

上記のねらいにあるように、本研修講座の主たる目的は教師用RCRTという方法を用いて参加者自身に担任学級の児童・生徒に対して自らが有している視点を客観的に把握させ、参加者相互およびベテラン教員の学級経営の実践を知り、それらを学級経営に活かす手立てを考えてもらうことにある。そこで2日間の研修講座の最初にグループワークを取り入れながら他者認知の一般的傾向を踏まえて子どもに対する教師の視点の特徴を理解す

るための講義を行ない、初日の午後に教師用RCRTを実施した。2日目には午前中に教師用RCRTの個別結果をフィードバックし、午後からはその結果を元に、参加者各自の学級経営の課題分析と今後の取り組みについて参加者相互と講師のベテラン教員の討論を中心に検討した。なお結果のフィードバックを2日目に行うのは、参加者ごとの統計的分析と個別のフィードバック用紙の作成に時間を要するためである。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
講義1	90分 (1日目午前)	他者認知の不正確さや曖昧さについての心理学的な知識を習得し、子どもに対する偏った見方の可能性に気付く。	冒頭に簡単なグループワークを行なって「視点の多様さ」についての実感を促す。さらにパワーポイントによる資料を用いて錯視図形や印象形成実験等の心理学的知見を紹介しながら、他者認知の不正確さや曖昧さについて解説する。
演習1	120分 (1日目午後)	担任する学級の子どもに対する自分の視点を把握する。	教師用RCRTを実施する。なお、この作業は研修参加者各自のペースに合わせて個別に進行させる。
講義2	30分 (2日目午前)		パワーポイントによる資料を用いて教師用RCRTの解説を行なう。
演習2	80分 (2日目午前)		教師用RCRTの個別結果をフィードバックし、結果の解釈を行なう。研修参加者の個別の作業に並行して、講師は机間巡視をしながらコンサルテーションを行なう。
討論1	120分 (2日目午後)	子どもに対する自分の視点と学級経営について考える。	教師用RCRTの結果を参照しながら、各自の学級経営の課題分析と今後の取り組みについて検討する。参加者相互および講師のベテラン教員の討論を中心に進行する。

○ 実施上の留意事項

教師用RCRTは参加者各自のペースで実施するが、作業のスピードには参加者ごとに大きな違いがある。そこでこのセッションを初日の午後におくことで時間調整を行なう。

○ 研修の評価方法、評価結果

参加者10人による事後アンケートによって評価を行った。「実際の教育実践に生かせる内容だったか」に対しては9人が、また「全体として期待通りだったか」に対しては8人が5点満点の「5」と回答しており、本研修講座は極めて好評であったと考える。また事後アンケートの自由記述欄には、ほとんどの参加者が「自分自身では気づかなかった視点が理解できた」「今後も定期的に自分の視点を振り返ろうと思う」といった感想を記していた。さらに2日目の討論では、講師のベテラン教員を含めた参加者相互の教育実践に関する意見交換が活発に行なわれ、各自の経験を所属校内でも共有する働きかけが重要であるとの認識が強まったことが窺われた。これらのことから、本研修講座が目的とした「子ども理解における自己改善力を向上させ、メンバーシップ醸成および人材育成に貢献するミドル・リーダーの育成」は概ね達成されたと考える。

○ 研修実施上の課題

8月末に実施した昨年は例年よりも参加者が少数であったことから、今年は8月中旬に開催したところ、定員上限の10人の参加となった。事後アンケートからは、本研修講座には単に「10年経験者研修として(2人)」というよりも、「大学主催の講座に興味があった(5人)」「研修内容に興味があった(4人)」という動機から受講していたことが確認され、教員研修に対して大学は大いに期待されていることが窺える。年間を通して学校現場の忙しさが増しているなかで、できるだけ多くの教員が参加可能となるように開催の時期等を考慮することが必要と考える。

開発の実際とその成果

4. 「先輩教員とともに学ぶ特別支援教育

－『通常学級の授業づくり』と『個別の指導計画』－」講座

○ 研修の背景やねらい

特別支援教育では、従来の特殊教育（障害児教育）の対象となる障害のある児童生徒に加えて、発達障害（LD, ADHD, 高機能自閉症・アスペルガー障害等）のある児童・生徒への個に応じた教育・支援の充実を目指す。発達障害のある児童生徒は、知的障害を伴わないことから、通常の学級に在籍することが多い。今回の研修講座では、特別支援教育の質的向上を目指していく上で大切なポイントとなる、「(1)発達障害の児童生徒が在籍する通常学級における授業づくりの向上」と「(2)個別の指導計画のバージョンアップ」を取り上げる。(1)については、発達障害の児童・生徒が在籍することを前提とし、発達障害のある子どもへの視点を重視した授業・学級づくりについて講義・演習を行う。(2)については、特別支援教育では「個別の指導計画」を作成することが求められてはいるが、作ることが目的となってしまっているところもある。個別の指導計画を児童生徒にとって意義のあるものにするためのバージョンアップをねらいとした演習(情報交換を含む)を行う。

今回の研修講座では、これまで学校現場において特別支援教育に長年取り組んできた先輩先生に講義・演習に参加いただき、先輩教員が培ってきた実践知の紹介をもとにディスカッションを行い、ともに学べる機会にしたい。それらを通して、特別支援教育における「授業力」と「生徒指導力」の向上につながることを期待できる。さらに、この研修で得られた知見等を学校内でフィードバックすることにより、特別支援教育の文脈における「授業」と「個別の指導計画」の学校全体での取り組みの向上につなげること（「メンバーシップ醸成力」）ができればと考えている。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：通常学級・特別支援学級、特別支援学校の教員

人 数：5人

期 間：平成23年8月22日（月）～ 23日（火）2日間

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：宇野 宏幸教授、井澤 信三准教授

今津 恵教諭（加古川市立平岡小学校）

八乙女利恵教諭（兵庫県立上野ヶ原特別支援学校）

井上 和久教諭（兵庫県立赤穂特別支援学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

本研修では、基本的に先輩教員による講義と質疑応答(午前)と演習(午後)を組み合わせた2日間を構成した。1日目のテーマが「通常学級における授業づくり」、2日目のテーマが「個別の指導計画のバージョンアップ」を設定した。演習・ディスカッションに多くの時間(各日で3時間)を配分するように配置した。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
先輩教員に学ぶ「通常学級の授業づくり」	2時間	発達障害のある児童生徒が在籍することを前提とする授業・学級づくり	内容：小学校・中学校における通常学級での授業における特別支援教育の視点の持ち方を解説し、どのように授業づくりを試みているか実践例を紹介する。それをもとに、受講者

		の工夫を理解する。	によるディスカッションを行う。 形態：講義 使用教材：プレゼンテーション・ソフトを用いた講義
特別支援教育のための授業研究の仕方	3時間	発達障害のある児童生徒が在籍することを前提とする授業研究の仕方を理解する。	内容：実際の通常学級における授業を撮影した映像をもとに、授業における検討すべき視点(教師の動き、児童生徒の反応、学級全体の動きなど)を明示していくとともに、受講生による主体的な授業評価を試みる。 形態：演習 使用教材：情報処理室におけるパソコンによる映像にて共有する。
先輩教員に学ぶ「個別の指導計画」	2時間	「個別の指導計画」を作成する制度的・実質的な概要を理解する。	内容：特別支援教育では個に応じた指導を実現するためのツールとして「個別の指導計画」がある。子どもの実態把握から指導実践を効果的なものにするためには、「個別の指導計画」をどのように作成・活用していくのか、実践例の紹介を通して解説する。それをもとに受講者によるディスカッションを行う。 形態：講義 使用教材：プレゼンテーション・ソフトを用いた講義
「個別の指導計画」のバージョンアップ	3時間	「個別の指導計画」に関して、意見交換を行い、各受講生の改善点を学ぶ。	内容：各受講生が、実際に作成し、活用している個別の指導計画を持ち寄り、それぞれの良さや修正点を明らかにし、他の受講生の「個別の指導計画」をも参考にしながら、理想的な指導計画のあり方をディスカッションし、すでに作成し活用している「個別の指導計画」の具体的な改善（バージョンアップ）を行う。 形態：演習 使用教材：各受講生が持参した「個別の指導計画」

○ 実施上の留意事項

本研修では、先輩教員および多様な参加者による意見交換に基づき、学校現場において抱える課題を解決するための基礎知識と応用的な力を獲得できるような研修内容にするため、2日間にわたり、十分な時間を確保し、演習に相当時間数をあてるようにしている。

「特別支援教育の授業研究」では、発達障害のある児童が通常学級における授業での先生と当該児童生徒において、どのような相互作用が生じているかを把握した上で、先生に求められる適切な指示・援助・支援のポイントを焦点化した。「個別の指導計画」バージョンアップでは、1)誰が、いつ、作成しているか(作成の手続き)、2)書式について(盛り込むべき内容)、3)学校内の引き継ぎ等での使い方(活用の仕方)、4)保護者の参加の仕方、5)管理の仕方(個人情報の保護)、6)「個別の指導計画と個別の教育支援計画との関係整理」をディスカッションのポイントとした。

○ 研修の評価方法、評価結果

研修実施後に、受講生に対するアンケートを実施した。研修全体への評価としては、おおむね良好な評価であった。特別支援教育の視点からの授業の見方・捉え方については、子ども一人一人の特性，すなわち先生や他の児童との相互作用を評価していくことにより授業を工夫していくといった授業力を高めることができたと評価できる。また，これまで受講生の各学校で作成してきた「個別の指導計画」が前述した1)～6)の視点から，まず自分の担当する部分における改善は十分達成されると考えられる。さらには学部・学校全体における「個別の指導計画」の改善にもつながることが期待されるが，これについては現段階では評価できていない。

○ 研修実施上の課題

本研修は，主に10年目研修に当該する教員を対象としている点では，参加者もおおむねそのような傾向であった。今回は参加者が少なく，ディスカッションにおける視点の多様性が確保できなかったところがあり，今後の課題として残る。一方，少ない受講生により一人一人の参加者から深い学びにつながったという意見もあった。双方のバランスをみながら，実施方法について検討していく必要がある。

開発の実際とその成果

5. 「理科野外活動が得意な先生になろうーベテラン教員を目指してー」講座

○ 研修の背景やねらい

児童は野外で目にしたさまざまなものを教室に持ってきて、教員に見せる。また、理科の学習の中で校庭や学校周辺の生き物の観察を、季節を通して行う。しかし、多くの小学校教員は理科を苦手とし、児童が持ってきた生き物の生活はおろか、その名前も知らないことが多く、多くの教員が指導に困惑している。全ての教員が、理科の野外活動が得意になることは難しいが、得意なあるいはどのように児童を指導すべきか理解している教員が各校にいることは重要である。

本講座、前半は授業力の向上を目指し、生物の野外学習を受講生自らが体験する時間とした。すなわち、会場周辺から植物や昆虫を採集し、採集したものを観察した結果や、図鑑と照らし合わせて知った生き物の名前をはじめとする情報を「発見カード」にまとめ、発表するという学習過程を模した作業を受講生自ら体験した。ここでは、図鑑の選択の観点をはじめ、児童に参照の方法を指導する上での注意点などとともに、生物の分類群を知ることが、生物を同定する上で必須であることを学んだ。

引き続いて、児童が作った「発見カード」の事例を見て、児童の視点について確認した。さらに「発見カード」を使った地域学習や観察路の設定など野外学習への展開事例をはじめ、身近な自然に興味を持つ子を育てる実践事例を開発する過程やそこに至るまでの教員自身の学びの過程を示した。教員が1人であるいは職場の仲間などとともに学ぶ姿勢こそが自己改善力を身につけることだと確認した。

最後に、野外観察の大切さを認識した経緯と、野外観察を指導するために必要な知識などをどのようにして学んだか、学外講師の経験事例を紹介しながら、自ら学ぶとともに、周囲の同僚とともに学ぶことの大切さを再度確認した。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：小学校教員

人 数：10人

期 間：平成23年8月26日（金）

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：渥美 茂明教授

西山 修教諭（丹波市立久下小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

研修に参加する教員の動機の第一は新しい知識や授業技術の習得である。従って、ミドルリーダー育成を目指す本講座においても、知識や技術の習得を第一にしないわけにはいかない。そこで、野外観察と採集した動植物の観察と記録を体験する研修に、所要時間の半分以上を当て、児童が体験する野外学習のすばらしさと、野外学習を通した生き物学習の必要性を納得するように企画した。

ついで、受講生が体験した実践を企画した動機や実践の開発過程を教員自らが解説する必要があると考え、約3分の1の時間を当てた。身近な自然に興味を持つ子を育てたいと考えた（嘗ての）若手教員がどのような学習と研究を積み上げて、野外学習の指導に長けた教員と呼ばれるようになったのか自ら解説した。

最後に、野外学習を通した生き物学習に対する、理科教師としてのスタンスについて意見を述べ合い、最後にベテラン教員が若い教員に期待することを話して、研修を終えるように、研修を計画した。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
動植物の野外学習の体験の研修	120分	発見カードを用いた野外学習	<p><内容>動植物の種の同定を経験する。</p> <p><形態>演習</p> <p><使用教材>植物図鑑と昆虫図鑑，採集してきた動植物</p> <p><進め方>今回使用する図鑑の特徴を，小学生に相応しい図鑑の特質に基づいて解説した。引き続き，大学構内について地図を使って解説し，採集に出かけた（約30分）。持ち帰った動植物を調べ，「発見カード」を作成した。採集した生物や作成した発見カードをスクリーンに投影しながら，各自が発見を報告し，講師が発見カードを用いた学習を指導し，必要に応じて補足説明をした。</p> <p><留意点>受講生が自ら野外に赴いて，動植物に触れることが大切である。多くの教員が児童と野外観察を行う機会を持たず，教室内で過ごしていることに注目する必要がある。</p>
野外学習の教材開発	70分	野外学習に向けた教材開発	<p><内容>生物野外学習を指導する教員が知っておくべき知識(内容)について</p> <p><実施形態>講義</p> <p><使用教材>生き物下敷き(自作)，兵教の生き物(CD)</p> <p><進め方>講師が自らの学びと工夫をさまざまな資料とともに示した。特に，野外学習の教材製作や，学校周辺の観察路の整備などについて解説した。</p> <p><留意点>危険な生き物についても，知っておく必要がある。</p>
共同的学习の研修	20分	まとめ	<p><内容>職場(学校)やサークル活動を通じた共同的学习の意義を確認した。</p> <p><実施形態>講義と協議</p> <p><使用教材>パワーポイントによるプレゼン</p> <p><進め方>学外講師の教材開発の経験を交えたプレゼンを見て，教員個々人の資質向上に必要な学習活動について協議する。個人的活動の限界について学んだ。</p> <p><留意点>特にない</p>

○ 実施上の留意事項

実施当日の天候が大きな問題になる。今回は晴天に恵まれたが，雨天の場合，降雨量によっては野外での採集が難しくなることが予想される。このような場合，校舎周辺の人為環境に生息する生き物を採集することになる。

今回使用した植物図鑑が絶版となった。この図鑑に替わるものを探す必要がある。

○ **研修の評価方法, 評価結果**

自己改善力：採集した植物や昆虫の名前を調べるための知識（上位の分類階級すなわち、科や目のレベルでの生物の特徴や差異の把握）を身につける必要性和一旦身につけてしまえばさまざまに使えることについて、多くの受講生がよく理解し、自らの知識や技能レベルの向上に努める必要性を認識したと評価する。研修の当初の目標は十分に達成されたと考えられた。

授業力：発見カードを使った指導事例を通して児童の観察力の可能性について理解し、さらに下敷きづくりを通じた学習に興味を持ち、実践したいとする受講生が見られたことなど、受講生は野外学習と生き物調べの必要性を十分に理解したと考える。

○ **研修実施上の課題**

標本づくりなど、より発展した活動を取り入れる工夫を行いたいが、受講生の集まりやすさを勘案すると、所要時間を長くしない工夫が必要である。

開発の実際とその成果

6. 「校内研修の企画と進め方

－教職員が主体的に参加できる研修をつくるには？－ 講座

○ 研修の背景やねらい

自主的、自律的な学校づくりが求められる中で、そのために必要な教員（集団）の職能開発を学校単位で行うことの重要性が増している。少なからぬ自治体で、教員の大量退職・大量採用が進んでおり、近い将来学校における教職員集団の年齢構成のアンバランス傾向が顕著になると予測されている。そのような状況下で、世代間交流をいかに進めて学校づくりを行うかが重要な課題になる。

このとき、学校のトップリーダーである校長の役割が重要であることは間違いないものの、教務・研修主任を任されるミドル・リーダーの役割も同様に大きいものとする。特に上記の現今の教員の年齢構成を考えると、校内研修など特定の経営場面において、教職員の世代間での学びあいや、学校課題解決への参加意識を高めるようにこれを運営することは、ミドル・リーダー特有の役割となろう。その意味で、ミドル・リーダーが校内研修の方法論の習熟を通じて、人材育成力やメンバーシップ醸成力を高めることの意義が認められる。

以上の問題意識から、本研修では、校内研修の学校づくりへの意義、その企画のポイントと研修実施にあたっての工夫（教職員が主体的に参加し、教職員間での学びを深められる研修づくりの方法）を、講義・演習方式で具体的に学ぶことを通じて、人材育成力やメンバーシップ醸成力を養うことをねらいとする。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：小・中・高等学校、特別支援学校の研修担当教員

人 数：5人

期 間：平成23年10月25日（火）

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：大野 裕己准教授

亀岡 正睦元教諭・指導主事（神戸親和女子大学准教授）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

まず、受講者が校内研修の捉え方を見直し、学校づくりと校内研修を関連づけて意識するように促す内容の講義を行う。校内研修の意義と目的、校内研修の現代的課題、校内研修の企画と進め方について講述し、学校の課題・目標を念頭に研修のねらい・内容を企画する必要性を述べる。

次に、元小学校教諭から、在職時の校内研修の取り組みについて報告していただく。教員個々の力量向上と研修の位置、子どもや学校の課題・目標と具体的な研修の企画方法、進行の工夫を報告する。教員の内発的な参加意欲を引き出す研修づくりの工夫が強調される。

そして、勤務校の実態に応じた、学校づくりを促進しうるような校内研修計画を立案する演習を設定する。内容は、個人でのワークシート作成と、それに基づくグループ討論で構成する。ワークシート作成演習は、①勤務校の児童生徒・教員集団の課題と研修の目標設定、②年間の研修実施計画立案の二つで構成される。グループ討論では、各自が作成内容を報告し、他の参加者や研修指導者（大学研究者・元小学校教諭）から意見や助言を受ける形で進める。

○ 各研修項目の内容，実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方等

研修項目	時間数	目的	内容，形態，使用教材，進め方等
校内研修の捉え方	40分	校内研修の捉え方を各受講者が再構築すること	<p><内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研修の意義と目的 ・校内研修の課題 ・校内研修の企画と進め方 を講述した。 <p><実施形態></p> <p>講義</p> <p><使用教材></p> <p>講義資料</p> <p><進め方></p> <p>資料に基づいた講述形式</p> <p><留意点></p> <p>受講者が，学校づくりや教員集団の力量開発の考え方から校内研修を捉えることの重要性を伝える。</p>
事例紹介	60分	学校で実際に取り組まれた事例を学び，校内研修の考え方と進め方の理解を深める	<p><内容></p> <p>元小学校教諭のベテランの立場から，校内研修を企画する上での構想や工夫の実際を，本人の取組事例を中心に紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業を変えることと教師の成長の関連 ・校内研修の構想と工夫の実際 ・研修場面での世代間交流の工夫 <p><実施形態></p> <p>講義と意見交換</p> <p><使用教材></p> <p>講義資料・パワーポイント資料の併用</p> <p><進め方></p> <p>資料・プレゼンに基づいた講述</p> <p>講述後，受講者と意見交換の時間を設けた。</p> <p><留意点></p> <p>研修の具体的な進め方や工夫の他，前提となる考え方も伝えてもらった。</p>
演習・討論	120分程度	<p>① 研修の課題・目標を明確に設定する</p> <p>② 年間研修計画の策定の在り方について理解を深める</p>	<p><内容></p> <p>左の①②に即した個人演習とグループ討議を行った。受講者の課業は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勤務校の実態・課題（子ども・教員集団）を分析し，校内研修のテーマを設定する。 ・設定したテーマに照らして有効性のある研修の年間計画を，講義内容も参考に作成する。 <p><実施形態></p> <p>演習</p> <p><使用教材></p> <p>講義資料</p> <p>演習ワークシート</p> <p><進め方></p> <p>演習ワークシートへの記入</p> <p>相互の内容報告と意見交換</p> <p><留意点></p>

			<p>研修テーマ，目標が明確になっているか，体系的な計画が編まれているか，教員が主体的に参加できる工夫がなされているか，成果評価の計画は適切かが，ポイントとなる。二人の講義者は，個人作業時にもそれぞれの受講者の内容をこの観点から確認して助言すると共に，グループ討論でも積極的に助言・意見提示した。</p>
--	--	--	--

○ 実施上の留意事項

演習では，受講者が勤務校の実態を踏まえて作業を行うことが大事であるので，前半の講義セクションにおいても，受講者に適宜発言を促し，勤務校の状況を振り返らせると共に，その内容を踏まえて演習段階での助言を行うこととした。

このとき，本研修で育成を意図した人材育成力，メンバーシップ醸成力の基盤にある組織マネジメント力量の把握にも，できるだけ留意することとした。

○ 研修の評価方法，評価結果

演習シートの作成状況，討論への参加の状況から，受講者の研修の成果を評価した。また，研修終了時のアンケートも成果把握の一助とした。

受講者は，それぞれの現任校の演習シートにおいて，それまでの講義や意見交換を踏まえて，教員集団の現状と課題を明確にし，それに引きつけて研修の主題を，教員集団の切実性を高める意味で設計できていた。この点には，受講者のメンバーシップ醸成力の向上をみることができる。さらに各受講生は，研修主題に即して開発する教員の力量，そのための体系的な研修の組み立て，研修を円滑に進めるための工夫も検討できていた。この点は，受講者の人材育成力の向上の現れとみることができる。各受講者は，自らの演習シートを他者に説明し意見交流する中で，さらなる改善アイデアを考え提案する姿勢を見せており，これも上の二つの能力の伸張によるものと考えられる。

また，アンケートを参照すると，後述のように運営の方法にいくつかの課題を認識できるものの，力量形成面については概ね研修の所期の目的は達成できたと判断できる。

○ 研修実施上の課題

終了時アンケートの結果は，受講者が概ね本研修講座に満足したものと解釈できるが，受講者が少人数であったことを考えると，本来は満足度はより高いレベルである必要があり，改善の必要を感じている。

- ・ 招聘したベテラン教員の先生が，具体的な研修事例を素材に，校内研修の基礎にある考え方（教師の成長と研修の関連や教員の相互コミュニケーションの在り方），研修の構想の方法を両者に踏み込んで講義されたことは，受講生にも好評であった。
- ・ ただ，前半の二つの講義内容と後半の演習内容（校内課題の分析と研修テーマ・活動の企画）の関連が形式的にはやや薄く，両者の内容上の関連を強化する工夫が必要である。
- ・ 受講者の人数が比較的少なかったため，当初の時間配分予定を変更し，前半の講義段階から受講者との意見交換時間を長くとったが，そのために演習時間が長引いてしまった。研修実施の基本として，終了時刻の遵守を徹底したい。

開発の実際とその成果

7. 「水彩指導のポイントを学ぼう」講座

○ 研修の背景やねらい

本研修のねらいは、ベテラン教員が積み上げてきた水彩指導のポイントを学び、自らの水彩指導の充実を図ることである。ミドル・リーダーとして必要な授業力の向上を図るとともに、本研修を契機に、日々の授業実践を反省的に捉え、一層自己改善に努めることができるように考えた。

水彩指導は図工教育の中心的な課題であるといっても過言ではなく、特に近年、子どもたちの描画力の低下や、教員の水彩指導への苦手意識といった問題を考えると、ミドル・リーダーとして図画工作科の指導力の向上を図ることは急務であるといえる。

そこで、ベテラン教師の指導により、水彩絵具を用いた短時間教材の制作を行い、パレットの使い方や筆運び、彩色の順序など、図画工作科における「水彩指導」のポイントについて検討する。また、そのことを通し、今日の美術教育の諸問題に対する課題意識を高めたい。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：小・中学校教員（図画工作科（美術）の指導に関心がある教員）

人 数：18人

期 間：平成23年8月6日（土）

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：初田 隆教授

高田 美穂子教諭（明石市立花園小学校）

片寄 明教諭（三木市立三木中学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

講座のはじめに、参加者の目的意識を明確化する必要があると考えた。そこで、以下の点について、カードに記述したうえで、全員に発表していただくことにした。

①水彩指導で困っていること

②水彩指導で知りたいこと・深めたいこと

③水彩指導に関してベテラン教員から学びたいこと

さらに、初田が、今日の美術教育の問題点や課題を整理したうえで、講座の意義や位置づけについて説明する必要があると考えた。

続いて、小・中の図工・美術教員を講師とし、模擬授業の形式で、水彩指導の場面を実施していただくことにした。参加者が児童・生徒の役割を演じつつ制作に取り組むことで、教材のねらいやポイント、教師のパフォーマンスなどについて実感を伴った理解を促すことができると考えたからである。

その後、質疑応答を行い、模擬授業での気づきを、一層鮮明化できるようにした。

最後に、各自が記入したカードを集めてプリントしたものを配布し、本講座で学んだ事柄を確認する時間をとることとした。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
オリエンテーション・講義	1時間	参加者の目的意識及び課題意識の明確化。	<ul style="list-style-type: none"> ●以下の内容をカードに記入し、発表していただいた。 ①水彩指導で困っていること ②水彩指導で知りたいこと・深めたいこと ③水彩指導に関してベテラン教員から学びたいこと ●初田が、スライドショーで、今日の美術教育の問題点や課題を整理したうえで、講座の意義や位置づけについて説明した。
模擬授業	2時間	ベテラン教員が積み上げてきた水彩指導のポイントを学び、自らの水彩指導の充実を図る。	以下の内容を模擬授業の形式で行った。 <ul style="list-style-type: none"> ①高田教諭による水彩指導 <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな線 ・ハンカチの模様 ・サボテン ②片寄教諭による水彩指導 <ul style="list-style-type: none"> ・「明 中 暗」を意識した風景画
質疑応答	30分	学びの確認と共有化。	初田が司会をして、講師と参加者の交流を図った。また、上で用いたカードをプリントしたものを資料として、本日の活動を振り返った。

○ 実施上の留意事項

- 「模擬授業」に参加するうえでのルールを示し、リアリティのある活動にすることを心掛けた。
- 水彩実技を円滑に行うための環境設営（水を入れたバケツと空のバケツ、新聞紙、ゴミ袋などの準備、洗い場の確保等）に配慮した。
- 参加者の目的意識を明確にし、講座終了後に、自らの学びを振り返れるように考えた。（カード化、交流の場の設定等）

○ 研修の評価方法、評価結果

楽しい雰囲気の中で、模擬授業が進行し、参加者は真剣に制作を行っていた。事後アンケートの、講座の内容についての項目からは、研修への満足度がおおむね良好であったことがうかがえる。

また、自由記述では「現場の先輩教師」から学べたことの意義について触れられた意見が多数みられたことから、世代間交流の必要性が確認された。

「自己改善力」については「ぜひ自分も見習いたい」「自分のために、子どものために研修は大切だと感じました」「ヤル気が出た」といったように、研修を契機に自分の実践を振り返り、今後も自己改善に努めようという方向を示す意見が見られた。先輩教師の教育観や指導方法に触れることで、自己改善への視点が得られたものと考えられる。

「授業力」についてであるが、「講師の先生の声掛けの仕方がよくわかった」や「技術力向上が大事だと思いました」、また「適切なアドバイス」がいかにか効果的かがよくわかったなどの意見も見られ、水彩指導に関する授業への理解が深まったと思われる。

○ 研修実施上の課題

あくまでも図画工作科(美術)の授業を基軸とした研修であったため、本プロジェクトの主旨と合致しているのかどうかを検討すること。